
各角恋愛模様（短編寄せ集め）

著者寝留化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

各角恋愛模様（短編寄せ集め）

【Nコード】

N7871Z

【作者名】

著著寝留化

【あらすじ】

まあ……妄想って大切……みたいな

微妙に繋がった形で恋愛模様みたいな

好きです ラブコメ

各角恋愛模様

年下の彼氏

年下の彼氏が出来た。私に。……うん、それがどうした、おのれリア充目という話だろう。いやいや、まあまあ。聞いて欲しい。これまで私に出来た彼氏というのは、年下ではなく、同じ年や年上が多かった。ファザコンの気があるのは認める。ま、それはいい。

で、だ。

ゲロを盛大に吐きながら告られるというなかなかパンキッシュでクレイジーな告られ方をし、そしてOKを出したという謎。いやまあ謎でもなんでもなくて、実際見た目は好みだし、仕事は早い。優しい。イケメン。気が利く。年下とは思えない、スマートさを兼ね備えてる、けれど、微妙に間抜け。まさか自分にシヨタ属性があった事に驚きを覚えつつ、OKした。ゲロ吐くとは思わなかったけど。スゴイネタだ、ま、それはいい。ただ一つ、問題があるとすれば

……バイト

という点だろう。私は正社員。同じ職場だ。

そう、職場の飲みに行き、その時、アドレスを交換し、デートを何故かすることになり、そしてゲロを吐きながら彼奴は告白してきたわけだ。すさまじい。おかしいヤツである。

「えーと……じゃあ寝ますか」

「寝るの!?!もう!?!」

見た目は草食系という感じだったのに、意外とガッツかれた。いやいや。……悪くない。まあその話はひどく個人的な話なので置いとくとして。ノロケついでに言うなら、思った以上に上手かった。まあそれもうでもいい。

さて……

私は二十七で彼は二つ下。社会に出てしまえば、年齢というのは存外どうでもよくなるモノだ、と思う。十代は一つ違うだけで、何かがひどく素晴らしいと、何も考えずに思ってたが……大人だからと言って、大人だと限らないと学んだのはいつだったっけ? その点、

「のんこさん」

「何?」

「無茶苦茶可愛い」

うーん……さてさて。色々と悩んでいるのだ。最近。料理は旨い(多分私より)、笑顔が可愛い。微妙に抜けてる所も可愛い。これが、二つ上の余裕かしらん、と思いつつ、まあ実際収入も私が上。けれど、デートの時は向こうが多めに払う。気合い(勿論色んな意味を込めて)を入れている時は彼奴持ちが多い。

正直に言おう。

ヤバイ好きだ。

……。

それでもって、私の口はなかなか素直に動かない。これが年上の苦悩ってヤツかしらん。……なんかこう言ってしまうと負けた気がする。これまで付き合った年上の方が『可愛い』と言ってくれなかったのはそんな感じなのかしらん。なんて呟いてみたりして時間を稼ぐ。つか私はのんこじゃないっつーに。……ちなみに気合い（勿論色んな意味を込めて）が入ってる時は「さん」が取れる。私が『蕩れる』。困った。困った困った困った。

正直に言っちゃおう。

怖いのだ。

……いや、そもそも彼奴が居なくなってしまうえばそれはその苦悩云々の話では済まずに、きつともっと何かが、ねばついて、巣くって、挟っている何かが……何かがなくなる。これまで付き合って、寝て、色々としてきたが、どうも厄介な事に、巣くってしまった。

追ったら逃げられる気がする。

犬っばい、此奴で彼奴に逃げられてしまうような。

抱きしめきった瞬間、消えてしまいそうで……。

おいおい私。どうした私。美人社長を目指していた私は何処へ行っただ？

イケメン男妾でも五、六人侍らすか、かっかっか、とやろうとしていた私は何処へ行っただ？ええい！恋愛は無理難題を仰る！

などと真似ながら「あちよー」と奇声を発しながら焼きそばを作る。

いや、ていうかアレだ。抱きしめたら消えてしまいそうで、は、普通なら男側の台詞だろう。なんだろう？まあ確かに彼奴は微妙に

乙女な部分もあって、そう、妙に可愛いアイテムが好きで、変なマニアックな……いやいやいやいやいや私。ちよつと待て私。どうした私。いやつまり私。いやいやいやいや私。誤魔化すな私。

何を考えている？

彼奴がゲロを吐いていた瞬間、考えていたのは――

『ふむ……まあしばらく遊んでも……』

だったぞ？おかしいな。いつの間に。

どうして主導権が向こうに移動している？どこで間違えた？イニシア恥部は私が握っていたのではなかったのだろうか。恥部！恥部！もうわからん！ええい！いたまれろ！焼きそば！と、焼きそばに美味しくなあれの呪文をかけながら、ふしぎなおどりを踊ってしまふ。だー！と頭をかきむしろうかと思っただが自制した。

……うーむ。これは重傷だ。どうしよう？結婚するべきだろうか？

いや、待て！……難しい。

別に一緒になっていいんだが……仕事はどうしよう？私が家事？……正直向いてないのよね、と。彼奴の部屋に行った時、いやまあ、彼奴の部屋は私の部屋より狭いんだけどさ。何て言うの？空間の使い方とか上手くて。バイトで収入が私よりなのに、家具を上手いこと揃えてる所とか、凄いなあと思っただ・か・ら！そうじゃなくて！そうじゃないのよ！のんこ！

いやだからのんこじゃないっつーし！

彼奴の性だ！そう！彼奴の性！つまりはこれから電話をかけて仕事が終わったら、彼奴の性ということでご飯を奢らせて……奢らせて……むう……理由にしようとしてる。

なんだろう？厄介だな、私。

いやもういつその事、彼奴に主夫になって貰つて、仕事しながら生きようかしら……。それスゴイかも！二人で頑張る！したら家賃もスゴイ安い！私大変！？いやでも……。家に居るよりかは……。つて、い……。言えるかな？も、もし、だよ？……。そう、もし……

「俺がのんこさんを養うよ」

[illegible]

——つてやかましいわ！小さい私！大合唱かよ！

ていうかのんこさんじゃないし！

何て言われちゃったらどうしよう……。なんかもう……。いいです。いあん。裏返して。みたいな表情になりそう。でも私、他人から見るとそれほど表情に変化ないらしいのよね。

おかしい……一人で部屋に居る時は一歩間違えば全裸馬鹿と何も変わらない気がするのに。時々彼奴がじつと私の目を見ている時とかは多分、色々とバれてるんじゃないかと内心色々ぐじゅぐじゅして……って……もう！あー！わかんない！

というわけで、もうアレだ！これはデートするしかない！

そうと決めた私は結構気合いを入れて（色々と上から下まで）準備にとりかかる。

決戦じゃ！勝負じゃ！

結局、今日も何一つ決まらなかった。

あー……彼奴の汗……舐め取りたいかも……

我ながら変態だとは思う……。

……これって知られても大丈夫よね？

……うむむむ……

年上の彼女（前書き）

短編シリーズは管理しにくいのでここに覚えちゃいました 失礼

年上の彼女

年上の彼女

そうです。僕が噂の――ではなく、そう、俺。

彼女からそっちの方が良いと言われたのでそうしてる。

正直な話、俺に主体性なんてモノは皆無で。

何もかもが他人からの借り物で、雑誌やら本やら漫画やらラノベやら高尚な教科書やら辞典、写真やら電灯、自転車、流行、そのわけのわからない抽象的でひどくふわふわしているモノをどうにか組み合わせて構成しているのが俺である。

つまり、何処にでも居る、愛すべき人間達の人である。

むふふ。出だしよりオマエ、自信ありげじゃないか。だって？

そりゃアレだよ。僕には年上の――俺には年上の彼女が居るからね。

彼女の魅力を語るに当たって、とりあえず、念頭に置いておいて欲しい事がある。

つまり、彼女は冒頭で述べたように、僕からすれば全てが原物で、全てが結晶と言っている。まあ、彼女は否定するだろうけど。しかし、少なくとも、俺が感じている事の十分の一、百分の一でも伝えたいモノだ。

僕の身体を構成している物質で、何より誇れるのは彼女だ。誇れるのが他人というのはおかしい話だ、と言うかも知れない。けれどまあ、これは迂遠な自己肯定と言っている。ナルシズムというヤツだ。僕――いや、俺はナルシーである。そのすげー彼女の隣に居るのだ。さて、自信を持つな、という方が無理な話だろう。

僕の中での最優先事項は彼女に認められる事だ、あり、彼女を構成する一つの物質になりたいという事と言える。

……

いや、噛んでないし。

つまり所、彼女が自慢であると言うことは、ひいては僕もまた自慢にならねばならぬわけで、また傷つくようではいまいちという話もある。

わけがわからない？ いや、確かに。

多分、動転しているのだ。

何故か彼女に呼ばれて、部屋に行ってみると、押し倒されてすげー舐められた。

いや、ごめん、アダルトな感じではないんだ。

「なっくん……汗……」

「へ？」

——れろん……

……まあ夏だし？ 汗かくよ、そりゃあ。

しかしのんこさん……あんたその可愛さは異常だよ！？ 俺にどうして欲しいわけ！？ いやつか何！？ なにゆえ汗！？ 舌！？ なんか倒錯した世界に足を踏み入れそうだよ！？ 俺！

「むふ……」

ああ……いやいや。全く。女性ってすげえ。傷つかないとか嘘つきました。ごめんなさい。のんこさんにはのんこさんの世界があって、その世界では『汗を舐め取る』のがなんらかのキーファクター

を……じゃなくって！どうした！僕の理性！

「なっくん。ところで仕事は？」

「……えっ……ああ、仕事なら」

れろん……

……拝啓。母上。すみません。僕は彼女と付き合い始めて初めて世界の崩壊を目の当たりにしております。なんだかもう彼女の言うことなら全てを任せてしまいそうな自分が怖い。ああ……でもそんなんなったたら、多分、いやがるだろうなあ……のんこさん。

職場では、デートの時と全くキャラが違うと言っている。

職場ではきまじめ。委員長と言うべきか、いや、図書委員？ 砕けるところは砕いてるけど、線引きがパーフェクト。その辺の芸当はまあ高校生には必要ない話だけどさ。なんだろう……そう自分のコメントロールが上手と言うか。

だからまあ最初のデートでやられたね。やられた。やられまくったよ。

服従のポーズを取ってもいいくらいだった。

[illegible]

正直に言えばこれまで付き合つて、恋愛してきた人達に泣きながら、謝ろうと思うくらい惚れた。

全部を奪い取りたい。

何もかもを奪い取りたい。

強欲で、支離滅裂で、ただの性欲で——ボタンをかけたがえればひどい事になるくらい。

表情の変化は乏しいと本人も言うが、そんな事はない。

はつきり言って——

——破壊力抜群だ。

「あー……のんさん……無茶苦茶可愛いです」
「何ソレ？」

ふっと笑いながら手を振りながら言う。

少し潤んだ風な目、それに——

なるほど、耳たぶ。

素晴らしいじゃないか！葉風さん！

と僕は思ったモノだ。

易々と人の心の防壁をなぎ倒す鉄球！……いや、この表現もどうだろうな。なんかえっちがきいて、すまーとでしゃーぶな感じが、みたいなと同じくらいふざけてる風に聞こえるかも知れない。勿論、背景込みの意味で。

でもまあ背景込みの意味で真面目に易々と彼女の笑顔は僕の顎に右フックをキレイに入れて、トドメのフィニッシュブローを叩き込んだ感じだ。

そりゃ吐きますよ、ええ、吐きます。

可愛い、優しい、面白い、笑顔滅法素敵、無敵だよ、無敵。

いやつか僕は何を言ってるんだったっけ？

ああ、そう。舐め取られて気が動転してるんだった。

半永久的輪廻供給機関ドーナッツについて考察を続けているわけにはいかない。

いやつか色んな意味で我慢の限界だ。

それよりも僕——じゃなくて、俺が言わなきゃならないのは——

——はむ

わー！？ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？
ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？
きゃー！？わー！？ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？
きゃー！？わー！？ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？
きゃー！？わー！？ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？
きゃー！？わー！？ぎゃー！？きゃー！？わー！？ぎゃー！？

わ————！？

何故か耳たぶをはむはむされている。舌と唇の柔らかい感覚がむにむにと動く。だからどうしたんですか！？のんこさん！？なんかこうこれまでにない密着度にストレートさに僕は正直色々堪えきれませんよ！？あんたどれだけ僕を萌え殺す気ですか！？

全く。

いやまあほら、わかるんだけどさ。

駄目です。ホネヌキ。

とある研究員

とある研究員

そうです。私が研究員です。とある、と書いてしまうと必然的に言いたくなってしまうわけで。ついでに言ってしまうえば私が天才です。はい、そこ拍手。

その幻想をぶちこわす！

……

……はあすつきり。

さてさて、まあご存じの通り、研究員だけあり、私はどちらかと言えばエッジが利いて、シャープでクールな女です。

喜怒哀楽鉄面皮、女の皮を被った研究の鬼。おいおい。

なるほど。

皆そう思っていたのか……。

と、帰り際、忘れ物をして研究室を覗いた時に小耳に挟んだわけだ。

フルボッコにしても良かったのだけれど、流石に、高校生の時みたいに、そんな犬猫の喧嘩のような戯れをするわけにはいかなかったので、仕方なくその場は引いてやったことをありがたがれ。

と、普通に帰った。

わけもなく。

そのまま扉を開け、

「黙れ〇〇共」

と言ってやった。そこら辺に転がるじゃがいもの扱いは得意だ。大声と一発の有効性のある打撃は他人の意志を容易く籠絡する。私はおじいちゃんからそう教わった。でも、おじいちゃん。アレは超怖かったわ。……まあ解る人には解ってしまうかも知れないが、私の研究テーマは生物関係だ。あまり具体的にその研究の有用性、方向性、内容まで明かしてしまうと、……いやほら、ひくかも知れないし。

でもまあ微妙に明かすことにしよう。

私のレポートに並ぶ単語は

生殖 勃起 中枢 海綿体 ホルモン バランス 健康状態 肉
茎 ……

中学生の辞典に引かれたマーカーのラインの生物学的見地から云々、みたいな言葉の数々だ。単

純に言えばがぼぼずぼがぼで、これもある意味でひっかかるか？

やれやれ。

お金になる研究というのは、本当に生物の原点に限りなく近い方向しかない。

何が出来て出来なくなるのだ、あまり縁のなかった私からすれば、それは違う世界の出来事で……

……もしかして気付いてる？

そうよね。

こんな迂遠な表現をしてもバれる時はバれるわよね？

私は大学生時代の自分を羨む。

その勇氣に、向こう見ずな勇氣、無謀とも言う。

いや、

足元を見ずに飛ぶ、その勇氣。

「んなもん、どこでも出来るわ！」

まあ酔っぱらった勢いもあったのだろうけれど。

スゴイと思う。

出来ない。

ま、結局出来てないんだけど。

もっとさらっと出来るはずだったのだけど。

ていうか言っていないかしら？

言えないし、

見れないし

何をすればいいのかわからないわ。

何を？

彼を。

実際、彼を目にし、

「あ……うう……で……」

どうした私！？となる。

私は自称だけでなく、天才だ。年収は人が羨むほどある。憎まれっ子世にはばかる。やーいやーい。天才は罵倒の仕方も天才なのだ。はばかってるかどうかはとりあえず置いといて。お金はある。容姿

も……まあ悪い方ではないだろう。多分。微妙に背が高いのは悩む所だけど……。

じゃがいも共相手には。

「いやだから、その生殖行為における正当性と遺伝子の——いや、何を言ってるの？だから、つまり、頑強にすればいいんじゃないやなくて——」

なんて話は簡単にできるのに。

「あ……それで……お願いしま……しゅ」

あ、噛んだ

となる。

いやいや、私。

……大丈夫か？

「じゃあアレ？上巻は処女」

「悪いか！」

いかん。遺憾。如何であるー。先日の、のんことの会話がフラッシュバックした。

細胞膜が！細胞膜が暴走しそうだ！

ちなみにのんことは私の友人で、高校の時から知り合いだ。クール繋がりだ。

……

普通なら同類は敬遠しそうな話だが、気が合ってしまったのだから仕方がない。

ちなみにのんこにのんこと言うと怒る。

まあ気持ちは分かる。けれど、これはアレだ。親しさの表現と言うヤツでもある。

そのワンクッションはある意味で友情。いいぞ、もっとやれ。

そう！認めよう！

いやつか認めんのか！私！？

たかがコンビニ店員の男に恋したなんて！

……いや、たかがなんて台詞はいけない。そう……まるで、ただ、彼の見てくれに……いや違う！

思い出せ！私！

「じゃあ、上巻はどこでもって言うけど、誰とならどこでもできんの？」

そう！それ！免罪符！ゲトー！やったな私！
いいじゃないか！
そう、見てくれ！

容姿！

ただのイケメン好きなのだ！

私は！

別に私は彼のその声とか、のど仏、ついでに耳の形、優しげな雰囲気……じゃなくて、手先とか歯並び、いや、というかキレイな遺伝子配列をしてるんじゃないかと感じる素養が……あー、もうなんだなんだなんだ！？いやつかその辺の要素にしたって、ただの容姿だからな！？私！？いやそもそもアレだ。言葉を交わした事なんてまるでないし、こっちが一方的に恋して――

ぎゃーす！

待て！私！

恋――じゃあない！そう――性欲だ！性欲に違いない！

と、私は無表情に、他人の生殖の使用薬による研究結果（つまり回数。満足度。その他諸々）を打ち込み、予想される有効成分、ついで次の結果向上におけるステップに必要な媒体などをファイルに書き込む。

……我ながら、本当に、外見と内面があっていないと思う。

きつとコンビニでおやつを買ってる時もそんな感じなのだろう。

はあ……

内心の葛藤がそのまんま相手に伝われば良いのに……。

いや待て。そうすると私、彼に結局嫌われるんじゃない……

あ、流石に手が止まった。

まいて、まいて。

まき直す。ネジを締める。締め直す。

指が動き出す。

研究室の皆が一瞬何故かこつちを見たが……なんだっただろう。

[illegible]

まあ実際　企業の担当が見たらそこにあるのは価値価値価値価値
価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値
価値価値価値価値没価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値
価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値糞
価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値
価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値価値
価値価値価値価値価値価値なんだろうが。

この研究結果、考察自体は別の仕事に回すとして。

キーボードを叩きながら、研究を纏めながら、考える。

嫌われ――

あ、また止まった。

ぶわっ
――

一氣に汗が噴き出す。

眼鏡が曇るかと思った。

ポニーテールが弾け飛ぶかと思った……

いやどんな状況だ。

ちょっと待て。

仮にも！？仮にも私はアレだぞ！？

喜怒哀楽鉄面皮、女の皮を被った研究の鬼。おいおい。

なんだぞ？

その後に皮がどうやらというピンポイント爆撃をかます、ハッキリ言って、恐ろしい女で、ガチで憎まれっ子だぞ？……いつ襲われてもおかしくない。正直内心びくついている。戦う必要なんてまるでないところで戦ってしまう。

それが……それが、たかがコンビニ店員の男に……

いやだから……

……

で、私のそれが試される時が来てしまった。

「大丈夫ですか？」

ぎゃーす！？

コンビニ店員の男

コンビニ店員の男

当年とって二一才。

特に起伏無く、普通に生きてきたらフリーターになっていた。

……いや、俺自身いかな、いかなと考えていたけれど、気付いたらこうだったのだ。

受け入れるしかない。

というわけで夢は売れる小説家。

現実にはコンビニ店員であり、友人はデザイナーでかちやかちやっている。

年上の彼女が居るらしい。

リア充め。

羨ましい。

と思う。けれどまあ、アレだ。リア充め、と思えると言うことは俺自身、リア充らしい。

本当に、リアルがどうしようもない人間にそんな台詞は言えない。

まあ普通、四つ上を友人と言うのかどうかは意見が別れる所だろうけど、そいつと俺は友人だ。

ちなみに小説家も別に正確に言えば夢というわけじゃない。

バイトだけで毎日が擦り切れていくのに耐え難いから書いてるだけ、と言うのが正しい。一種のストレス解消。だから、ゲームで面白いモノが出れば一も二もなく飛びつく。飽きたら文字を書き込む。繰り返し、繰り返し。

とは言え、お金になれば嬉しいなあ、と思っていけないわけじゃない。

お金。

そう、俺が愛してやまないのはお金と言える。

お金があれば、家は買えるし、学校にだって行ける。学生諸君、その幸運をあますところなく享受したまえ、なんて俺が言うのはおかしいけれど、実際、今更そうとも思う。

大卒と高卒で、出来る仕事の入り口がまるで変わる。

大卒であるかないかだけで、入り口は容易に姿を変える。

なるほど、知識。

合コン。

やり方。

コネ。

すげーな、大卒。

これは嫌味だ。

そして僻みで、

羨望だ。

まあ大卒であれば、少しは、感じなくてもいい劣等感から解放されるかも知れない。

まあお金が好き、なんてのは、誰でもそうなので、大した特徴でもない。

お金に嫌われてるなんて事は、誰でも経験している事だろう。

俺より余程、困窮している人も居るに違いない。

同情しよう。

けれど、お金は俺にくれ。

そう、俺は優しくない。

お金があれば優しくなれる。

こういう心持ちがいかんのだ。やかん。いかん。

いや、つか、ぼくと言った方がいいか。俺、という語り口だとまるで、なんだか、妙に大人びてしまう。ぼくは子供だ。二十一だけど。

……いや、ぼくも不味いな。必要以上に幼く感じる。

僕でいいや。

被るけど。

あ、被らねえや。

彼奴、最近、微妙に混じるけど、俺になったんだったな。

これは丁度良い。

コンビニの深夜バイトは割に入る。普通に食べ物屋で働くより良い。何より、ゆるい。ハッキリ言って、毎日、社会性とか、そう言った大事な要素をボロボロとこぼれ落としている気がするけど、……これがずっと続けられるならこれ続けてればいいのだが。

きっと、そうではないだろう。

店長はすごい人だ。

普通、サービス業の上は性格が悪いと相場が決まってる。

そうでなければならぬし、そうであらなくてはならないのだろ
う。と言ったヤツも居るが、全てが全てそうじゃないという感覚
は正直嬉しい。

だからと言って、あの人がずっと此処に居ると思えない。所詮
店長も雇われで、俺はバイトだ。

何かあればすぐに首を切られるし、きつとずっと此処に居るなん
て不可能だろう。

多分、数字を弄っているヤツからすれば、それはどうでもいいこ
とだろう。

優しさや、心遣いなんてモノは数字に反映されてやしない。
明確な基準を持たない不確実性の――

あつそ、だ。

売れば勝ち。

売れなければ負け。

だから今日も僕は某かを書く。

……昼過ぎからいつも通りにシフトに入る。眠い。とは言え、僕
は『こんな』性格をしてるが、見た目はこざっぱりだ。そう、なん
か僻みとか恨み辛みとかうつつくして鬱屈したもやもやの類はやや
注意深く見ないと見えない。

店長は一目で見抜いてたけど。

全然注意深くねえよ。まんまかよ。と突っ込みを入れた方。

まあそうかも知れない。

いやほら、うちの店長、本能に頼ってるっぽいし。

……本能に頼ってるって表現も何かが間違ってる気がするけど。

「悪くない」

その後に発した一言には、変な感触が残った。

ま、それはいい。若いつて言うのは、どうでもいいことまでうじうじ考えるのだから。

と、どっかの小説か漫画で読んだはずだ。着ぶくれ異質。体質。速攻ザ・ヤングメン。

とりあえず、先輩と交替する。

しばらく経つと、お客が来た。

——お姉さんである。

僕が勝手にそう呼んでる。

知的美人と言う言葉がまさに正しく。

顎に手を当て、お菓子を選別する様はなんとも言えない。

まさにクール。美人。

クール・オブ・クールとでも言おうか。

いや、見た目からすると、そうは見えないのだが、僕の曇った両目からすれば、アレはきつとすげー悩んでる。

あ、……出たんだ。新作。結構好きだったのよね、これ。でも……そうね。この小腹の感じだと量的にはきつとこっちのスタンダードなクッキーの方が……ちよつと待て私！違う！甘い！そこはそうと見せ掛け……ってこれは流石に入らないか。好きだけど、ちよつと量があるのよね、このストロベリー……むう……あ、でもこっちのキャンディとかでも良いかも。悪くない、悪くないよ！キャンディ！……なんと！？何！？キャラメル！？どうしてそっちに食指が動いたの！？私！——はっ！？……く、クランチだとう……！？

ま、こんな感じ。

なんとなく。なんとなくそう思う。

さらにさらに。

……

……ま、それはいい。

レジで会計をする時はそれまでの颯爽とした態度が一変。なんだか異様に可愛らしくなる。……まあ買ってる物はお菓子類を除くと、まむしドリンクとかそんな健康促進系のえげつないのだけど。ギャップ萌え……いや、颯爽とした感じからすると……駄目だ。わからん。

とりあえず可愛いのは解る。

時間帯はいつもの暇な時間帯。

……しかし何か……なんだろう。違和感？

ふらふら。

ふらら。

ふららんらん。

……なんだか異常にふらふらしている。

あ、倒れた。

ありや痛いな……いやつか、飲み物のケースに頭ごと行かなかったか？

……大丈夫かな。

と、僕は彼女を抱き起こす。

「大丈夫ですか？」

とある研究員の話 2

とある研究員 2

あー、つまり、私が倒れたのは、そう、いやいや、認めるのか？私？

認めちゃえよ、認めるべきだ、そう、認めるんだ――――

……別に狙って倒れたわけではないけれど、

彼が居る時間帯で良かった。……むふ。

むふ……はないな。ないぞ、私。

いや、そう。状況の説明だった。

前日譚だ。

思った以上に好感触のデータが得られ、レポートが進み、気付いたら朝だった……。

いや、終わってるとか言うな。

確かに化粧が……なんでもない。

まあそんなにガッチガチに決めてるわけじゃないので、そんなに私は化粧が大変な方じゃない。……いや、好きですよ？めっちゃめっちゃ。自分がキレイになるのが嫌いなんて人はどうかと思うくらい。まあ好きだからと言って、振り向いて貰えるかどうかはまた別の問題で。燃料止まりなんて話はよくあるわけで。

女性誌の雑誌の化粧頁はハッキリ言って、楽しい。

悦楽しみ。みたいな。

まあ合う、合わないは置いて。

休みの日は、パジャマのままゴロゴロしつつ、化粧頁をふんふん言いながら見るのは、私の最高級の娯楽と言える。

墮落。

墮落サイコー！

私がガンダムです！

イエス！ガンダム！

……失礼。

まあとにかく、研究員なんてモノは、マニアックな世界であり、オタクと紙一重だ。勿論、数式を誰かと共有することにも楽しみを覚えるし、実証実験、結果は常に気になっている。それが全て、と言うのは、女の私からすれば、やはり男の意見だろうと思う。

つまり、化粧を嗜むのは……

いや失礼。ちょっとホッペタとか熱くって。暴走中なんです。私。

アオオオオオオオ——ん。

月に吠えてみた。

じゃあなくて。

「ちょっと、お姉さん」

「……うひ」

「お姉さん!?! うひってなんです!?! うひって!?!」

うーむ。我ながら、舌が回らない。……ていうか、うひって非道いな。ふるへっへんどし。じごすぱあああああああああああああああああああく!……

良し、大丈夫だ! 私!

「ちよーだいじょぶ」

「どう考えても大丈夫な人はそんな棒読みはしませんよね!?!」

まあ主に君が理由だし。

……

……っ!?!

言っただった! 言っただったぞ! 私!

妄想で……。

はあ。

ぴとっ……

……ぴと?

「熱、ありますね」

ビニ使えない。

いやでも……いやだから……いやでも……だからそう……いやでも……

「らいじょうぶれふ！」

「お姉さん!？」

……

後日談をしよう。

……え？唐突過ぎる？いやいやだって……ねえ。恥ずかし過ぎるでしょ。その後も大体似たようなモノだし。え？仕事？いや勿論、完璧。最高です。理論に実践に……

……

ふむ。

ぐふふうふふふふふふ。

……。

まあアレ。アレよ。コンビニが使い続けられるかどうかはその事務室に連れていかれ、挙げ句、彼が今日は余裕があるからという理由で、私を家まで送る事になり、……つまり、勝負をかけるのは今しかないと気合いを入れなおして（ちなみに私は早速部下にメールしたのは秘密だ。体調悪い……で通じる辺り、うちの秘書は完璧である）、はあはあしながら……いやそこはオフレコにしよう。そう、コンビニが使えるかどうかという理由があり、もういっそ駄目になるなら今しか駄目よ！上巻総帥！と自分を讃えながら突貫。面くらった彼を説き伏せ、挙げ句、押し倒し（いや、流石に最後までは……）『OK』の返事を奪い取ったという……

うわ——————アアアアアア！？

スっゴイアクロバティック！？

ものすっごいことしたな！？私！？

というわけで雇いました。

「……」

家で家政婦してるのが彼です。

「えーと」

「まっきー」

「……いやそれ、名字じゃね？」

「まっきー」

「いやどう聞いても油性マジックじゃね？」

「まっきー」

「えーと」

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

「まっかー」

[illegible]

「どわあ！？ 梢さん！？ 梢！？ 鼻血！ 鼻血が――」

コンビニ店員の男 2

コンビニ店員の男 2

えーと。ここから？何？僕、すげー中途半端なところから語られんの？いやいや。ちょっと待って。流石に待って。なんか恥ずかしい青春の主張した後だから、ちょっと無理というか、ちょっとなんと言うか……。

いやほら、僕、ダメンズだし——っただあああああああああああああああああああ！？

上巻さん！？

——っ！？ぎゃーす！

つねらないでっ！

……そう、まっきーこと梢さん。上巻って結構良いと思うんだけどな。語呂が良くて。

卑下するな？……はいはい。わかりました、わかりましたよ。うす。超好きっすよ、梢。……良し、ダウン。しばらく復帰して来ないだろうな、アレなら。

ていうかイエスイエス枕なんてのがあったのに、正直、僕は驚いた。……良く探してきたな……でも、この人なら手縫いか……？

……枕に顔を埋めながらゴロゴロしてる所はかなり可愛い。

まあそんな僕のロリチックな趣味と特殊性癖の話は置いて。

いやつか梢さん……

ゴロゴロし過ぎでしょ。

どんだけ楽しくなっちゃってんの？

普段すげー無口なのに。

そう、梢ことまつきーは、どちらかと言えば無口だ。

多分、内心ではスゴイ、それはもうものごっつい速度で言葉が波のように羅列並列直列ベルトコンベアーのように転がされてるのだからうけど（傍目で見ている限り、彼女のパソコンの打ち方は機関銃、演算処理が速過ぎるのか、口がその速度についていけないのか……

「ふみゅ……」

いや、ふみゅはないだろう。と、当初僕はよく思った。変な人だ。アレで僕より年上で、……いくつ上だっけ？ まあいいや。六つか五つだな、確か。実際、仕事モードの時は、顔つきが違う。言葉もなめらかで、生殖行為における、快楽の……と言った言葉だっけすら出てくる。イエスイエス枕なんてモノを買ってきた行動力もスゴイ。

でもまあ……

「……ごちゅ」

果たしてそれが何の言葉の形を為していたのかわからないくらい
の「ごちゅ」……。流石に僕に赤ちゃんプレイを要求する下地はない。ま、時間が解決してくれるでしょう、とのんこさんからは言わ

れたが。そういうあんたは最近ますますお熱ですか？と尋ねたら、ホッペタを引っ張られた。いひゃいいひゃれす！のんふおしゃん！と言ったら、余計に引っ張れた。

……もう二一なのに。

のんこさんと喋る時の速度……というか、僕に対するノロケは正直……嬉しいが、僕はそれほど褒められるのになれてない。

心底嫌なヤツだ……おっと。

卑屈禁止。

だからまあ顔を真っ赤っかにさせられたので許してください。

照れたんです。

……ていうかこれこそ完全なノロケだな。需要あんのか？これ？

あ、そもそも、どうやって付き合うことになったかの話だっけ？

えっと……確か、まあ彼女の家に送っていったわけだ。

……まあ、お世辞にも片付いてるとは言えない惨状だったのはまあよくある話として。

「ええと……」

「上巻梢」

「……んう？」

「まっきー」

「……」

んん？

と思ったが、とりあえず、彼女をソファに降ろそうと（おんぶして帰って来たのだ）する……降りない。……えいっ……降りない。身体を振ろうかと思ったが……

「ふぐぐぐぐ」

背後で踏ん張る音。……なんだろう、この人。

見た目とのギャップが激しすぎる。

と、一瞬の隙を突き（どんな隙だ）おんぶから僕の前面へスライド。どんな動きだっ!?

思ったら彼女は移動し、

……お姫様抱っこ。

……。

いや、待て。

おんぶからお姫様抱っこへ移行するってすげー難しくね？

「むっふっふ、私の頭脳を持ってすれば容易いわ」

……そして勝ち誇る。

まあそんな経緯があって、だなあ。

端折り過ぎ? ……いや、確かにそうだね。うん、そう。

いや、そんな女性に遭ったのは初めてだったからさ。そう、会ったんじゃなくて遭った、ね。遭おうと思って遭えるもんじゃないし、これを逃したらそこまでも知れないからさ。そう、遭ったのは初めて。間近で出会ったのは初めて。

一も二もなくそこで告白したわけだ。

「結婚を前提に僕と付き合ってください!」

やれやれ。

……いや、我ながら阿保だと思ふよ？

男性誌でよくある『ありえない告白トップテン』とかに羅列されておかしくない話だもん。前提も、経験も、相手の性格も、おかまいなしに、言ってしまうえば単純に見た目やら行動で判断したわけだからさ。『でさー、タカシのやつがさー』『ぎやはははは、彼奴は馬鹿だねー』なんてギャルが（死語かな？）言って笑い話にしかない告白方法だろう。

でもまあ、何よりの予想外は――

「喜んで」

親指をぐいっと立てるサムズアップ。

サムズアップだぜ？

ポニーテールでクールなお姉さんがお姫様抱っこされながらサムズアップ。

というわけで僕は――

って上巻さん！？

いや、デート行ってくって言っても、ほら、僕は今ちよつと――

ちよつと！？ええ！？

顔真っ赤ですよ！？

大丈夫ですか！？

爆発！？――ぐえっ……

梢さん！絞まってる！首絞まってるから！

引きずらないでえ！

バーのマスター

バーのマスター

……何？彼氏が浮気してる？

彼奴が？……あの抜けてなんか微妙にほえっとしているヤツが？

いや、ないでしょ。

え？そうじゃない？ほえっとしてない？きりっとしてる？うん……ノロケはよそでやってくれると助かるんだけど。聞いてないね、聞いてない。

……ふーん。まあ、アヤシイと言えばアヤシイわね、確かに。どっちともとれるわね。でも知ってる？でも、アニメやら漫画やら小説だと、まあ勿論、モノによるんだけど、そういうのは大抵勘違いで、ぼわーっと暴走して、挙げ句抜き差ししちゃって……いや違ったんだ、というのが山梨落ちナシの……え？私の趣味の話はいいから？

こりゃ失礼。

でもまあ、あんたがそうやって悩むなんて珍しいわね。

どちらかと言えば、あんたが振り回す側だったじゃない。え？今度は違う？振り回されてばかり？……いやあ……部外者の私からはなんとも。

え？仕事しろ？こちとら客だぞ？……そうきたか。

ええ、お客様が振り回されてばかりですね。

……心がこもってない？

まあそうかも。

でもまあ、振り回すのも振り回されるのもいいじゃない。何もないよりマシよ。

取り返しの付かない何かを起こしたら事だけどさ。

でも浮気……ねえ。

あのぽわんとした彼が？

ん？……ぽわっとしてない？むしろ、クールできりっ……うん、わかった。

帰れ。

こっちはバーのマスターなんてやって出逢いなんてねえんだよ！
じじいと二人でひたすら切り盛りしてるわけ！……ってやっかましいわ！じじい！……ま、立ち飲み屋に近い形態だから仕方ないとは思うけど。そ、イギリスのバースタイル。ぱくりもパクリ、もろパクリ。逆輸入の裏ビデオなみ。……え？洒落てる？……ま、まあ、その……

——って……

——わっかりやすっ！

おいこらじじい！何気分良くお酒振る舞ってんだ！？

いやいやいやいやいや、おい、こら。そして飲むな！それ、銀座で出したら、一杯七千円はつくのに！何、陽気に振る舞って踊ってるんだ！じじい！私だって喜びたかったのに！ずるい！ツンデレタイム！ツンデレタイムを実演させて！

……はあ

まあいいわ。でも多分、アヤシイと言えば、アヤシイけど、勘違いよ。保証する。

え？

なんで私が保証するのって？むしろ、私が彼奴の恋人？

いやいやないない——ってこわっ！？何！？いきなり何でビール瓶を装備！？少なくともヒノキの棒より怖いわよね！？

……浮気しろよ？格好いいじゃない？心が揺れ動くでしょ？

……帰れ。

マジで帰れ。

バカカップルは爆発しろ。

私がバカカップルになるのは許すけど、その他大勢のバカカップルは爆発しろ。

でもまあ、心が揺れ動くかどうかは別として、此処でしばらく飲んでれば解るわよ。

え?……なんでソレがわかるのって?

ふふん。

お姉さんは何でもお見通しのモノよ。

……いやまあ大学生の恋愛だし。

え?馬鹿にするな?

まあ確かにね。馬鹿にするべきじゃあ、ないわね。恋愛は恋愛。小学生の恋愛だって、本当は馬鹿にしちゃいけない。

けど、ねえ?

ほら、ドツキリってあるでしょ?

そう、ドツキリ。

さてさて、今は何月でしょう?

……うん。違うね、違う。

誰も春のアニメの終了は嘆いてない。

いや、確かにね。確かに寂しいけどね。

特に私は。

……

でも、いいんだ。今年は二次創作の当たり年だから……あ、その話はいいですか。さいですか。

残念。

そう、ドッキリ。急に戻したわね。

いや、ほら、ドッキリって、答が分かってるから楽しめるわけでしょう？

そうそう、私が犯人です……ってなんで！？そしてビール瓶が増えた！？

二刀流！？ごめん！ぜんっぜん格好良くない！けど身の危険はびしばし感じるわ！？

ていうか酔っぱらってる？……珍しい。

で、答は？

……え？解らない？……嘘でしょ？

いやいや、あるじゃない。ほら。そう、それ！

……いやごめん。誰もDVDBOXの話はしてないな、うん。いや、確かに私はね、そりゃもうたまりませんよ。色々汁が飛び散ってますがな。でもね、違う。うん、違う。薄い本の祭りはこれか。え？似合わない？……うるっさいわね。好きなの。好きなんだから仕方ないでしょ。

やかましいわ！じじい！あんたも年考えてガハラさんに萌えるのはやめなさい！

……失礼。

え？ありえないほど、オタク？……ははは、何を今更。ま、あのじじいはにわかだけどね。

……それで良く洒落たバーが勤まるね？……いや、まあ、そんなもんじゃない？実際、なんだかんだ言って、皆アニメとか好きよ。漫画然り。分かり易い〓人気が出るってのは、あながち間違いじゃないでしょ？

ま、その話をさらけ出すかどうかはその人次第だけど。私はその点、エロゲ、BL、音楽、英語、アニメ、ゲーム、小説、……ま、なんでもござれの雑食食いだからね。

背景の無駄さが違うのよ、無駄さが！がっはっはっは！

え？勝ち誇る所じゃない？

……出逢いがないのが残念。

さてさて。そろそろかな？

ん？何がって？

……ちよつと。いやまあ、確かに抜けてる所あるわよね、と思うところは結構あったけど、真面目に忘れてるの？

ま、いいわ。

せいぜい、鼻血でも出して床に這い付くばりなさい。

……

——十分後

……恋に盲目って……すごいよね。
軽く羨ましいわ。

年下の彼女

年下の彼女

デートにおける必須条件の一つにあげられる「まず生き残る事」ですが、父さん。

どうも、それを守れそうにありません。

先日の話になるのですが、

「ねえ」

「ん？」

「好きな髪型ってある？」

と、彼女に尋ねられました。ええ、年下です。彼女は……えーと……五つ下ですかね。多分。まあ……ロリってますね、正直。ジャケット着せて、シャツを着てネクタイをすると、もう完璧女子校生。そうそう、そっち。……警察の方の視線が怖い感じになります。

何をいきなり漫画やアニメみたいな台詞をあにはからやん、さては俺の本棚を探られた！？みたいな事を考えて、悩んだのは一瞬。

「ポニーテール……かな」

呟いてしまったわけです。ふあぼれ！ええ、そうです。齡三十も間近というのに俺は相変わらずこんなんです。……いやあ……大人……ねえ。

「そう」

しかし……まあ、俺より年下の彼女ですが、まあ、父さんならわかるでしょう。そう、俺より余程大人です。女の子ってすげー。いや、女性ってすげー、ですね。みたいな。まあ社会人になってしまえばこんなもんでしょうけど。

「あ、ボルドーでカベルネの……そうですね、重い方をお願いします。す。分かり易い方が好みです」

ソムリエの扱いも慣れたもんです。

とりあえずビール、か、もしくは、梅酒ロック！がせいぜいの俺からすれば青息吐息、さすれば心は五里霧中。ごりごりマッスル。君に首ったけ。

目を丸くしたのは一度や二度じゃあないですね。

ついで、

「かたぐるまー」

……だいぶキャラクターが崩れてる感じがしますが、そこがギャップ萌えです。軽く酔うとこんな感じですよ。ガチで酔うと吐きます。その辺も含めて可愛い彼女ですよ。

東京の雑踏の中、肩車をしながら歩いたのも一度や二度じゃないです。すみません。父さんが母さんを肩車してるのはどうかな、と思ってきましたが……

いやいや、悪くないですね。確かに。

世界の中心がまるで此処だと言ってる気がします。

まあそんな露出癖と注目癖は置いといて。

特にドラマチックな出逢いではなかった二人ですが、まあその事件が起こるまでは普通のカップルをしていました。まあ、肩車を普通のカップルがするのと言えば、確かに疑問を挟む余地はあると思いますが、一度やると癖になることは請け負いましょう。後は女性側のテンションです。ついでに言えば、この間、公園でお姫様抱っこをしながらグルグル廻ってるカップルを見ました。今度実行してみます。じゃあなくて。

そう、事件が起こったのです。

先日の突然の髪型の話題。

元々、彼女は、黒髪で、長かったのですが、拘りがあるらしく（その辺もぐらっと来た理由です。自分を作り上げてる女性は惚れます）、一貫したスタイルでこれまでは来ていました。せいぜいが、まあ、軽くカチューシャ（！）だったり、花を横に添えてみたり（！）、耳を出したり（！）、前髪をぐいとあげたり（！）だったのですが……

え？

ちよろい？

いやまあ、なんですか？ いちいち報告するな？

いやあ……って父さん！？ 切らないで！ 電話切らないで！

相談なんです！ 大事な！

……仕事が忙しいのはわかりますが、一応息子なんで愛情溢れる対応を……

あー、ごめんなさい！切らないで！

え？ガハラさんのふいぎゅあを鑑賞しなきゃいけないから？

……

ま、まあそれはいいです。

いや、聞きたくないです。

いや、大丈夫です。間に合ってます。

何が間に合ってるのか言っておいて謎ですが。

つまり！

だから話を戻しますが！

彼女がこの間「ポニーテール」でデートに来たんですよ！

いいですか！？ポニーテールですよ！？ポニー！
フルメタルパニックの犯罪者はオマエか？

……いやいやまさか。彼の気持ちはわかりますが。

おかげで、顔が一日中真っ赤っかですよ。

似合いすぎました。鼻血が止まらなくて。つまり、ある意味で黄金比で、彼女のポニーテールはそれこそ、神秘の領域、神のみぞ知る絶対領域、まあ、普段のワンレンも、それはもう素敵で素敵で素敵の三乗くらいで……聞いてますか？父さん？……あれ……いやだからもう一度言いますよ？つまり――

……「あれ？じじい、兄さんからの電話は？え？……ああ……また病気か……」

年上の彼氏

年上の彼氏

え？相談？私に？

……だからのんこじゃないっつーに。

……まあ、いいわ。この台詞使つてると、怒られそうだし。

ええ、私がのんこさんです。

ふむ。年上の彼氏が出来て、しばらく経つと。

攻略法？……いや、そんなんあるのかな？

髪型でも変えてみたら？

……彼氏がまる一日鼻の穴にティッシュを詰めていた？

……大概ね。

え？

魅力が通じてるかわからない？

いや、多分、すげー通じてると思うわよ。

これ以上ないってくらい。

分かり易くっていいじゃない。私の彼氏なんて「好き」を言ってくれるのは嬉しいけど、マシガンだからね。惚れられ過ぎるってものなかなか恐ろしいモノよ。

……え？弛んでる？……

……恐ろしいモノよ。いつからこうなった……？

はい！はいはい！私のホッペタの話はいいから！
で？その彼氏の写真とかないの？

お、プリクラ。……うん、すげーラブラブね。今度、彼奴にこういうプリクラを撮らせるように言っておこう。

え？何？

果たして、結婚出来るんでしょうか？

いや、出来るんじゃない？

話を聞いている限り、ポニーテールでストレートに、

「結婚しましょう」

と言えば、うん、と頷くと思うけど。

絶対アレでしょ。髪型とか、顔周辺にワンポイント入れると、彼、
気付くでしょ？

なんで解るの？って？

ほら、男って服より、顔好きだから。服装が目立つのは暗めの場合ね。トータルより、意外と一点豪華主義、大艦巨砲主義って言う
と時代錯誤も甚だしいかしら？

化粧とかはわからないけど、そういう分かり易い部分だと良く気
付くのよ。

ていうか、単純にその彼があんたの事を超見てるからだと思うけ
どね。

……あんた、男の視線とか鈍そうだもんね。

……え？……いや、ほら、ねえ？一応、私、女性誌のデザイナー
だし……。

いや、褒めるな！照れるでしょうが！

でも、アレね。どうして、彼と付き合うことになったの？ていう
かどういう出逢い？

ふむふむ。

つまり、普通こういうわけだ。

……どんな出逢いよ！？

ないわよ!?! いや、私と彼奴も大概だけど!

普通ですよー、あははは。

じゃねえよ!?!?

真面目に!?! いやいや! いやいやいや!?!
この人こんな見た目なのに!?!?

そこがいい……ねえ。

確かに。

ギャップって大事よね。

へえ……。

軽く懂れるわ。

……彼奴も鍛えておくべきかしら。

ていうか、あんたにそんな趣味があったという驚きが先に来ただね。

え?……普通か。

まあそうね。確かに。

ところで、彼氏の名前聞いていい?

……もしかして、なんだけど。そう、ホントにもしかしてなんだけど。

バーのマスターやってる妹居たりする?

……世間で狭いのね。

彼の友人

彼の友人

あれ？珍しい。うちは飲み屋じゃないですよ。

……いや、怒らないでください。というか、悩み事ですか？

……へえ……てっきり、ざつくばらんに、なんて表現久しぶりに使いましたが、気にせずストレートにやる人だと思ってましたけど、案外悩むんですね。

いや、知りませんよ。

え？……いや悩むまでもないですよ、そう言うことは。考えすぎはよく無いですって。つか、十分ラブラブですよ、ラブラブ。

……にやけないで下さい。

にやけてない？……はい、鏡。

いやいや、何を驚いてるんです？それが今の貴女の顔ですよ。でれんでれん。

私は由緒正しきツンデレだ？……大丈夫デスか？貴女、最近、ただのでれでれですよ。

いや、無理してツンを気取ろうとしても無駄ですから。ま、日常

生活が充実してれば仕事も気合いが入るし、周囲も元気になるんですよ、マジで。

そう言えばこないだ、彼奴が来てましたね、うちに。なんか悩んでみたいで。

……いや、なんですか？その『ま、まあ、別に興味があるわけじゃないけど、聞いても良いかな？』って。リアルツンデレは。ま、別に口止めされてないんで明かしちゃいますけれど、どうも『結婚』について悩んでみたいですな。

いやあ……悩んでますね。何かあったんですか？……ほう、ほうと。

……

いや、嫁は貴女じゃないですか。

『私の嫁になれ！』

どんな告白ですか。……ま、先手を打たれたら、確かにペースを乱すでしょうね、彼奴。何の話を呟いてるんだ？いや、……なんでしょうね。俺自身よくわかりませんよ。さて、此処で一押しするべきか、種明かしするべきか。性格が悪いんで、一押ししときましょ

う。そうです、そうです。

彼奴、指輪を前に悩んでましたよ。

……え？

指輪を買った？……あー……この質問は『あえて』させて貰うんですが。姐さん、……プロポーズって知ってますよね？……いやそりゃ俺だって、経験者じゃないんで、正確な所は知りませんけどね。普通、此処で言う『一般常識』って、あくまで俺の幻想で、イメージなので細かく突き詰められると、なんでもないんですが、俺の一般常識によれば、やはりプロポーズは男側からの『誓い』とか『制約』だと思っんですが？

うん、それは知ってる。

ならいいですね。

え、……違う？

うんうん。

つまり姐さんはこういうワケですね。

『嫁が家に嫁ぐのが普通なら、旦那を家に縛り付ける場合、それはもう、女からのプロポーズ。絶対幸せにしてやるからと言うべき』

と。

うーん……見事に一般常識を反転させましたね。

……男らしい。いや、漢ですね、最早。

漢らしさが一周回って最早可愛らしいの世界に突入してますよ。

どこの電磁砲ですか、貴女。

ああ、大丈夫。貴女に通じなくても、解る人には解ります。

まあ、彼奴はネット主体のデザイナーだから可能でしょうけど。
共働き。

……後日談がある？ いや、というか、彼奴が来てたの一昨日です
からね。

じゃあその話は三日前ですか。……随分タイムリーな話ですね。
ふむふむ。そのまま、区役所に赴き、そのまま結婚の手続きをその
場で……いや、既に結婚してたんですね。その事実には驚きです。も
とい、どん引き。そう言えば……いや、なんでもないです。

じゃあ、彼奴が悩んでたのはなんだったんでしょうね？

……メール？ ああ、彼奴から。

……満面の笑みですね。

ああ、はいはい。お腹いっぱいです。いってらっしゃいます。

——翌日

……いや、そのリヤブリヤブ度はすでに殺意を抱くレベルですね、マジで。

つかいちいち報告に来るなあ！

指

指

レジ打ちの佐山です。え？いや、女の子です。顔つき？……いやまあ、卑下するつもりはないですけど、ごく普通でしょうね。普通。悪くもない。けれど、格別良くもない。そんな感じ。体つきもどちらかと言えば、そんなにグラマーでもないし……ま、外見にさしたる魅力もない、ただの本屋のレジ打ちです。当年とって、二十三。はあ。大学は行かず、専門学校に行ったモノの、当然、そんな簡単に人生が進むはずもなく、フリーターで、バイトしています。

出逢い？……真面目に聞いてます？

別にないわけじゃないですが、サービス業で同じ職場ってのは結構大変なんです。安定してませんし。後、大学生が多いってのもありますね。まだ二十三なので、正直、世間を知らないと言うか……いや、やかましいです。うるさい。黙れ！

処女の何が悪い！

……こほん。

いやまあ、見た目が普通な性か良く勘違いされますが、普通に恋愛した事はありません。一切合切。いや、小学校の時とかはありますよ。中学校の時もありましたね。でも、どちらも上手く行かず（まあ……上手く行かってのもどうかと思いますが。……失礼）、最終的な結論には至らず（まあ当然でしょうな）、現在に至るというわけです。え？高校？……女子校ですが何か？

誰が少女漫画中毒者じゃ！

……いや、失礼。認めましょう……自身の少女漫画中毒を！

でもね、男性の皆さん。私、思うんですよ。手を引っ張れ！口説け！って。

察しろ、と。

それは卑怯だと言うかも知れませんが、そういうものなんです。何もなくて、貴方の気をひきますか？何もなくて貴方の視線を注目させますか？何もなくて抱きつきますか？

いや、高校生の男性諸君は知りません。自分で自分のを弄ってなさい。勉強しなさい。というか、大学生になってお金を稼げ。責任を取れる状態で告白しろ。

まあでもこれはただの妄言です。ただの本屋のレジ打ちの嫉妬全開フルバーストです。全部撃ち落とします。最狂最悪のニート……じゃなくて。

困ってることはそれじゃなくて。

「……指、キレイですね」

へ？

そう、これ。

……流石に、握られはしませんでした……。まるで指は見ずに私の目を見て……

にこっ……

さてさて。諸君。

こういう演出は止めて下さい。嬉しすぎます。嬉しすぎて一周しちゃって、逆に冷静になっちゃうくらいです。はい！ストップ！ストップ！私の火照り！火・照・り！そしてニヤニヤするな！梅ちゃん！（隣のレジ打ち。同僚）

「ありがとう」

左隣に居るニヤニヤ（鼻の穴が開く可愛い女の子）する梅ちゃんの横っ腹を親指で突きつつ（『ああ！痛い！地味に痛いよ！』）、私は右手で自分の耳たぶに触れました。熱を持ってる耳たぶが『言われた』現実を指していて……なんだろう。

「ニヤニヤ」

……友人をパイルドライバーするべき、という単語が頭を過ぎりました。

「ちょ——まっ……！！！！——にゃーす！」

まあそんな事があって。

とは言え、好きになるほど、私は尻が軽いわけもなく、というか、うちの本屋はそこそ広いので、そう簡単に休日に私のレジに来るということもなく、指折り日にちを数えるようになって一週間。

隣の梅ちゃんが「パイル」という単語だけでビクツとなるようになったのは置いとして。（まあ日常生活でパイルなんて単語はそういう口にしらないでしょう。普通）

その日も混んでいたの、まあ……会えないだろうな、というか、何を期待しているんだ、私。つかそもそも、彼の見た目が好みじゃなかったら、ドキドキもしなかった癖に……云々かんぬん……ま、そんな（傍目にはそんな邪悪な面に取り憑かれた風ではなかったらしいです）、邪な黒々とした思いを抱えながらその日もレジを打ち、本にカバーをかけ、隣の同僚に時々眼鏡を光らせてあげてたんです。（私の特技です。キラーン）

来ちゃいました。

おいおい。

「こんばんは」

きやあああああああああああああああああああああ！

！！！！！！

その笑顔は反則です！

レッドカード！レッドカードです！退場！退場してください！

——ついてってあげますから！

おいちゃんが更衣室で反省をうながすまで良いことをしてやろう
……ゲヘゲヘ……

……はっ……危ない危ない。……いやあ……暗黒面に引き摺り落とされる所でした。厄介です。（『だから！地味に痛いよ！聞いている！？ていうか連射モード！？連射！？あのスーファミとかのコントローラーにあった連射機能だよね！？コレ！？』）隣で、梅ちゃんが何かを言っていますが、正直それどころじゃ……それどころじゃ……

『指——マニアックなその嗜好に至高。全ては指のために。フィンガーオブ“ユビバース”』

……どこのハリー大尉でしょう？ていうか、このネタ解る人がコレを買うんでしょうか？ユビバースって……。微妙に上手いところがこっちのむかつきを誘いますね、コレ。

つか、リアルにマニアックな人じゃないですか——！！！！！！

え！？私の指！？つかパーツ狙い！？真面目な話……

などと考えていた所へ――

「ところで、お茶しませんか？」

……まあ……その……いや、何よ。別にいいでしょ。

男日照りよ！ ええ！ それよ！？ 悪い！？ 悪いと言うのか！ 処女は死ねと言うのか！

……ん？

いや……私だって、そりゃ、あの台詞を『さらっ』と言われたら行かないわよ。……誰が欲求不満じゃ。認めるけど。悶える処女って私の事だもん……ってやかましいわ！ そうじゃなくて。顔が真っ赤っかで、いや、そりゃ演技かも知れないけれど、店員がさりげなく、全員注目してる中、そう言うことを言ってくれたってのはそのまま嬉しさなの！ 解る！？

で行ったのか、と？

……

……

……

ああ！行きましたよ！行きましたとも！あの眼鏡！キュートなめが・ね！何あれ！？ていうか何あの照れ！つか、年上！年上なのにあの可愛さ！ナ・ニ・ア・レ！？

『いや、指だけじゃないんですよ。正直……その……』

『魅力的で……』

萌・え・殺・す・気・か！？

語っていい？語っていいわよね？そう！あのつぶらな瞳！指に注視する変態性！その真剣なめちゅき！……目つき……何よりあの照れっぷり！微妙に癖がある髪！眼鏡の似合う好青年！首筋をかりつとする癖！照れると真っ赤になるほっぺ！

……いや、そこじゃない？……ああ……尋ねるわけ？コレについて？……うーん……そうそう、……いや、私もまさかね。自分に此処まで変態性があるとは思わなかったわ。

『耳タブー・オブ・ザ・イアー』

……目覚めちゃった……。

だって……くあいだもん……彼の耳たぶ……食べた……

じゅるり……

「病気だね」

……

……

……

………キラーン

……友人をパイルドライバーするべき、という単語が頭を過ぎりました。

「ちよっ——それは——まっ……ぎゃーすっ——……!!!!?」

眼鏡の男

眼鏡の男

あれ？……あきさんのお友達じゃないですか。というか、どうして此処に？……ああ、なるほど。あきさんから聞いてたんですか、僕の職業。なるほど、なるほど。……ていうか、貴女、旅行する氣在りませんよね？……それは関係ないって台詞を聞くとは思いませんでした。仕事中ですよ、僕。いいから、話を合わせろ？……あー、なるほどー、スキーに興味がアルデスネー……これでいいですかね？というか、あきさんの友達だけあって、えーと、梅さんでしたか？特殊な方ですね。いえいえ、ご謙遜を。

十分変人ですよ。

……オマエに言われたくない？失敬な。僕ほど、実直で素直であきさんを愛してる男はいませんよ、マジで。……いや、そこで照れないで下さい。そして羨ましそうな目で見ないで下さい。いや、耳たぶに注目するのもよしてください。……ていうか何ですか？梅さんまで耳たぶに目覚めたんですか？……むしろ歯並び？……いや、わかりませんね、僕には。

ふん、ユビバース風情が、フェスティースに敵うわけがあるまい？……いや、ユビバースの方が上手いんじゃないですかね？……『フェスティース……歯並び祭り——哲学としての歯並び——』……いや、興味ないです。……おっと、へえー、スキーを嗜んでらっしゃるんですねー……で？……いやいやいや、大丈夫です。要りませ

ん。なんです？布教用に置け？……間に合ってます。僕はあきさんの指とあきさんが居ればそれでいいです。いや、それが最高。素晴らしいです。世界が慈愛に満ちてます！

ユビバース！！！！！！

……こほん。失礼。

で？ナニしに来たんですか？此処に。

……は？男を紹介しろ？……いや、齒並びなんて気にしたことないですよ。男の齒並びなんて見ません。見たら、僕は完全なゲイじゃないですか。……

……鼻息荒くすんな。

……ていうか、何で僕の上司を呼びつけて……

え？休憩に行け？ていうか今日はもう帰っていい？……梅さん……

……？貴女何者？

……名探偵？

本屋で働く？……まあ、別に何だっていいですけど、その名探偵がなんの用です？……ふむ。ふむふむ。

墮としたい男が居て、攻略法が必要だと……。

それで僕に聞く、と。

……いや、まるで不適材不適所ですね、それ。

え？あのあきちゃんを落としたんだから大丈夫って……いや、知りませんが。まあ確かに、あきさんはすげー可愛いですけどね。難攻不落って感じです。笑顔ちょー可愛い。語っていいですか？いや、聞いて下さいよ。入りだけでいいですから。大体プロローグで三十六時間程度なんで。指については……って……ああ、残念。じゃあ、あきさんの魅力について語るのはまた後日……。残念です。

というか、梅さん。聞き違いでなければいいんですけど、墮としたいという言葉って……

ああ、墮落でいいんですね……いや、どっち？落下ですか？それとも墜落事故のついで的な？ふむふむ。

ええ、門外漢です。やかましいわ！こちとら童貞なんじゃない！

最近卒業したばっかなんじゃない！

……ええ！？其処でひくんですか！？

いやだから、そもそも僕がこの年までですね、こうなったのには理由がありまして、詰まるところ、指に目覚めたのが十五の頃で……
…（うんぬんかんぬん）……

だからそもそも女の子のハートをゲット出来たのもある意味スゲー
アクロバティックで、奇跡の一手だったんですよ！マジで！これまで成功例がなかったんですから！だって僕『指』に目覚めちゃいましたからね！？このマニアックさに気持ち悪さ！どうしようもないでしょ！？いや、あきさんは認めませんけど、美人です。それと同じくらい、指も完璧です！パーフェクト！つまりですね……

……

「感想は？」

「……（ぷすぷすぷすぷす）」

煙が上がっている。

名探偵としての仕事を終えたあたし、名塚梅は、赤面し、ぷしゅぷしゅと音を立てている友人をもう一度見る。そう、あたしは名探

偵。本屋のバイトは仮の姿。盗聴、録音、爆破、父親のコネと母親のコネを駆使し、悪の華をあたしにとって良い方向に書き換え、『魔王』とも称され生きる名探偵。

幸せ絶頂の友人の祝福の仕方くらいお茶の子さいさいである。

先日、この気の良い耳たぶに目覚めた友人に、

「誕生日プレゼントナニがいい？」

と尋ねたら、

「いや、別に……」

と、顔を真っ赤にしながら、言ってきたので、

「じゃあ、あまりに嬉しくて焦げちゃうようなプレゼントを用意してあげるね」

と宣言したのだ。

そこからはもう簡単。いつも通り、録音機材を利用し、あきちゃん、の彼氏の上司に話を通しておき、彼氏にあきちゃんについて語らせる。むふふ。それを雑音を削り、適正な音量に編集しなおし、再生データにし、物理的なプレゼントとして、再生機とデータを共にプレゼントした。ご飯三杯は軽いに違いない。やーん、お腹いっぱい。みたいな。

と、今、渡し、聞いてるなと思ったら、イヤホンを耳に突っ込んだまま、あきちゃんが椅子を引き、立ち上がる。

やれやれ。そんなに改まって礼を言う必要なんてないのに。と思ったら、

がしっ……

……がしっ？

「パイルっ——」

途端、身体がびくんっ、と跳ねるが、時既に遅し。まま、椅子から肩を持たれ、宙へと持ち上げられ、そのまま——

——「ドライバー！！！！」

地面へと叩きつけられた。

「——ぎゃーすっ……」

流石……あきちゃん……衰えてないね……プロレステクニック……

薄れゆく意識の中……あきちゃんが歩いてカフェの出口へと歩くのが見える。

……スキップをしながら……

悦んでんじゃん！

と、あたしは突っ込みをしたとき。

後日。

彼氏のその語りを聞きながらぽーっとしてる友人を休憩室で見たのは、当然ながら秘密だ。

.....

(ぼそっ) 変態め……

——ってあきちゃん!?! いつの間にあたしの後ろに……!?!?!?!

ぎゃーす!

彼女とラーメン

彼女とラーメン

そう言えばいつ以来だろう。

と、目の前で湯気を立てている麺をずぞぞーとすすりながら考える。

人参とピーマン、それに豚肉。豚骨ラーメンと形容していいのかわからないが、間違いなく、使用していたのは豚骨ラーメンだ。

二人で暮らし始めてなんのかんのと五年。

私は先行き不安が半端無いCDショップの店員で、彼は本屋で働いている。

ワーキングプアというヤツだ。二人合わせて三〇いかない。

契約社員というバイトだ。

正直な話、辛いと言えば辛いが、辛くないと言えば辛くない。

子供が居るわけではないので、先の心配がないというのも大きい。子供がいたら、真面目な話、私はキャバ嬢やら風俗嬢になり、アレしたりコレしたりして彼に面倒見させるのが一番良いだろう。

なんのかんのとあって、今日は久しぶりに二人の休日が重なった。

で、彼の料理を食べている。まあ手抜きだけどさ。

でも、冬に食べる温かいモノは本当に美味しい。衣食住足りて礼節を知る。

まさに。

寝起きの機嫌の悪い人は大抵、朝ご飯を食べない人である、と言っていたのは誰だったっけ？まあ、うちは二人が同程度の稼ぎだからか、比較的食べ物、掃除、洗濯に関してお互いがやる。多分、彼

の母親がしっかりしていたのだろう。でなきゃ、これほど、マメに家事をこなす男というのも珍しい。

「なこさーん、お風呂入るー？」

「入るー」

「一緒にー？」

アホだ。真正正銘のアホだ。

そのアホに参ってる私も大概だけどさ。

なんていうこともなく、ふとした瞬間、例えばソファで寝転びながら、彼が本を読んでいる時（萌え系も読む。最初は敬遠してたが……最近は後で私も貸して貰う。マスラオ、レイセン、ミスマルカは熱い。たまらんです）やら、なんやらに見る首筋。喉仏とか。勿論、そのパーツ単体で見ても楽しくはないんだけど。彼についてるパーツだから、とでも言えはいいのかな？ 暮らす前はまるで気付かなかった魅力的な部分を発見し、私は一人悶える。

腕とかね。腕。

血管とかね、血管。

頭をかく癖とか凄く好き。

人参の香りが拡がる。

かみ砕く。喉を通り、胃に呑み込まれる。

咀嚼し、麺をすすり、汁を飲む。

砕いてみるとややこしい。

ぼやんと描いていた円が輪郭をハッキリさせるように人参が主張する。

こんな味だっけ？

それだけ私は色々味わってたものをないがしろにしていたらしい。

目の前の彼は真剣に

「ずぞぞー」

と麺と格闘していた。真剣に。鼻の頭に細かく刻みすぎた人参を乗せながら。

私は特に何かがあったわけじゃないけど、楽しくなる。

戦え、食え。飲め。そして、戦え。

まさにその通りだ。

「ん？」

麺を口から垂らしながら、お間拔けな顔をあげる。

食いながら顔をあげるなっ……にやけながらそんな事を思う。

勿論、まだ人参はとれてない。やれやれ。

私は手を伸ばして、

「ん」

人参を頂く。

頂いた。

咀嚼する。

「んん？」

やっと麺をずぞっと音を立てながら、呑み込んだ彼の唇を奪う。まさに。

奪う。

頂いた。

「にひっ」

そんな休日。

突っ伏す私

突っ伏す私

二六の私と三二の私の間に横たわる海峡は深いようで浅い。

などともうでも良いことを、動き回るバーテンダーを見ながら思う。

洒落た店じゃない。洒落てると言えば洒落てる。

スーツは似合わないが。

故に、一般的な洒落てるという感覚とはだいぶ離れているかも知れない。

バーテンダーというよりかは、友達だ。

友人に会いに行く感覚で私は此処に通ってる。

彼の腕がコップを掴み、勢いよく初めのビールが飛び出す。慣れた所作で、しばらく置き、再度キレイに泡を盛りつける。私からすれば呑み込めば一緒なのだから、別にいいのにも思うが、そこはそれ。気分的なモノだろう。

「お待たせ」

華奢なイメージなのに、その腕はしっかりと見て見える。注意深く見れば、お腹も引き締まっているのが見える。まあ、引き締まっているのかただ痩せているのかと聞かれれば、多分、痩せているだけだと思う。失礼。それほど、私は男を知らない。三二なのに。

ただ、そう。

良い体をしている。

健康であり、何かが表面を弾けてる身体を見るのはそれだけで楽しい。

跳ねればいいのに。

飛べばいいのに。

そんな事を思い浮かべながら、つまみのポテトをつまむ。
しまった。

ケチャップをつけ忘れた。

とは言え、啞えたモノを出してつけ直すというのもなんだか恥ずかしい。

例え、カウンターで一人にせよ。

そういうモノだ。

二六の時と違って、三二になると、傷つくのがだいぶ怖くなくなる。

性欲に身体が追いついたとでもいうのかな？

コントロールする事に慣れた、というか、コツを掴んだというか。

二一くらいの男の子の気持ちが少し分かる。

だからといって、誰彼構わず、と思う程ではない。

多分、充足してるからだろう。

泡が弾ける。

跳ねればいいのに。

そんな事を考えながら私はビールを飲む。

時々忘れるが、アルコールは胃に温かみをくれる。

ほんと。

一息つく。

目が合う。

可愛い笑顔だ。

きゃーっと騒がれる男じゃない。……いや、騒がれるか。

決してサービスが、テクニクが、というのではなく、もう少し

厄介な感じ。

タイミングが良い。

来て欲しい時に来てくれる。

それは、こないな、と感じる一歩手前。

欲しいな、と思った時に声をかけてくれる。

ま、接待が好きなおじさまには人気がでないだろうけど。

何せどちらかと言えば安居酒屋だ。

でもま、私はこういう雰囲気が好きだ。

まるで知らない他人とカウンターで相席し、乾杯する。

そういう空間はあるようでない。

それが彼のおかげなのは間違いがない。

一人じゃ私はそういうことをしない。

「仕事は？」

「順調」

「そう言えば、彼氏は？」

そんな話を交わす。

寝たら楽しいだろう。多分だけど。

彼氏も居るのに、と言う人も居るだろう。でもまあ、妄想は自由だ。

実際にやるわけじゃない。

で、帰って彼と燃え上がるワケだ。

我ながら……まったく。

彼の手を思い出して。

「……偉い可愛い表情してるね」
「まあ……ね」

ビールを舐め取る。

舌が熱を持つ。

やれやれ。

彼が通りかかる。

個人用に注いだ鍋だ。

私は彼に微笑む。

「へっ——ってあちっ」

あっ、跳ねた。

もったいない。

男三人

男三人

良し、話はわかった。

わかったが、とりあえずお前等、どっか行け。

え？

横暴だ？

こちら客だぞ？

馬鹿な！

結婚した友人なぞ知らん！

お前等と違って、カフェ経営、しかも自営業でチェーン店じゃない、家の稼ぎなんて微々たるもんなんだ！大変なんだよ。しかも、うちの客って珈琲一杯で粘るだろ？安くもなく、高くもない値段だから、大変なんだ。……ああ、ありがとう。

ていうか名雪！オマエに至ってはのんこさんの愚痴吐き場がうちだぞ！？

なんなんだ！？アレは！オマエにわざと伝えさせようとしてるとしか思えないんだが？

何？

ずるい？バカカップルは爆発しろ！

馬鹿夫婦め！

え？口が悪い？

気の性だろう？

あ、いらっしやい。

久しぶりです。ええ。いやいや、奥さんこそ、相変わらずおキレイで。

はい、はい。

上木ー、頼むー。

……なんだよ、その目は。普通だろ、普通。

ああ、上木さん？長いよ。相変わらず可愛いよ。高校からの付き合いだしな。

いや、別段恋愛関係じゃないな。

というか、そうじゃなくてさ。

なんでお前等二人して主夫やってんの？

……

そういう時代？あ、そう。

まあそんなモノかあ。

ふむふむ。

……というか、なんでおれが相談に乗ってるんだ？

やかましいわ！

にやにやしなからこっちを見るな！羨ましいだろうが！

っーか、のんこさんと、えーと、まっきーさんは家に居ないの？

ああ、仕事。

いやいや、凄いな、最近。少子化が加速するわけだよ。

え？

そんな社会風刺は要らない？

ああ、確かに。

で、何をしにわざわざ此処に来たわけ？

ふむ。二人のお気に入りメニューを知りたい、と。

……なんだろう。

スゴイ、何かがひどく間違ってる気がしないでもないんだが。

それに、のんこさんもまっきーさんも料理下手じゃないんじや……

うん、確かに。疲れてる時は作る気力わかないもんな。

いや、二人とも普通にオムライスハンバーグラUNCH頼むけど。

そ、ソースが売り。

たかるな。売らない。

あんだよ。

おれだって、一応考えるよ。というか、ほら。稼ぎがないって致命的だろ？

何をどう考えてもさ。

そういう点から見ても、カフェの店主ってのはなあ。

これ以外やりようがないし。

料理人だな、潰れたら。というか、早い所鞍替えしろって話かも知れないけどさ。でもほら、お前等が来たり、お前等の彼女が来たり、近所のお姉さんが来たり。悪い空気じゃないからさ。びびりなおれとしては、此処を締めたくないと言うか。

って、上木さん！？

なんで泣いてる！？

いや、止めない！止めないから！というか後輩よ！いつまで先輩と言う！まるで、なんかそういういけないプレイを――

って上木さん！今度は鼻血！鼻血！

大丈夫？……ああ、そう。プレイに反応したんだ……。

上木は確か二つ下、程度だよなあ……。

とりあえず何故か倒れて幸せそうな表情を浮かべる鼻血を垂らした後輩を見て、おれは首をひねる。

男三人 2

男三人 2

「で、プレイについての話なんですが」

「いや、珈琲の注文についてだろ、上木」

「失礼、噛みました」

「偽物語？」

「鼻血出た」

「どうして!？」

つい、テンションが上がってしまって、口が滑りました。

さて、珈琲「長屋間」の店主、もとい先輩は今日も格好良いです。
えへ。

私が高校一年生の時からの先輩なので、かれこれ……何年だ？ 待
て待て、私。そう、アレだ。今私が……二三。ふぬ。つまり先輩は
二五で、単純計算で九年。近所付き合いが始まったのが、九才の時
からだから、一四年。

いやー……えー……

で、相変わらずのこの距離感。

……

今日はバカップル夫婦の旦那二名が来て、先輩のカフェガード（
私命名…効果…サービルの顔を崩さない女性対応の極み）が微妙に
ノーガード戦法になっている。

どこのヤブキジョーですか！先輩！

キャー！格好良い！

しかし！

待て私！

これでは、もしかすると、キレイなお姉さんが来たら、先輩のイケメンぶりと、ノーガード戦法でクロスカウンターを決めてゴールインされる可能性がある……！！！！

苦節一四年！片思いの重み！發揮してくれる！（勿論バツチり笑顔です。サービース業の鑑と言われるのです！私は！）

「そう言えば上木は彼氏は――」

「いません！」

「あ、ああ、そう……」

のんこさんの旦那さんが気まずい笑顔で引いた……！

違います！そういう意味での否定ではないんです！

内心わたわたするが、思いつ切り否定してしまった！これではただの行き遅れメンへ――

「でも、上木は可愛いし、大丈夫だろ」

せんぱーい！

愛してます！

いますぐ嫁に貰ってください！

もしアレなら養ってあげるんで私の嫁でもいいですよ！

——ぷっ……

思わず妄想が行きすぎて鼻血が出た。

まったく。困ったモノだ。

ええい、先輩め。

そう、先輩と出逢いは私が九才の時からだ。先輩は当時一一才。ひたすらぷよぷよを二人でやったのが最初だ。私はお姉ちゃんやっていた性か『ぼよえくん』を出すのが普通だった性か、先輩はひたすら負けていた。当時の私は、そりゃもう性格の悪さにかけては右に出るモノなしというある意味無敵状態だったので、小学生の先輩はかなり頭に來たのじゃないだろうか。しかし、そんな事はおくびにも出さず、

「何ソレ！？やべえな！」

とかなんとか言ってきたきゃっきゃ喜んでる先輩を見て、私は——

——惚れたわけだ。

……我ながらどうかとは思う。

というか絶対顔。顔がイケてたから。そっちの方が理由として、なんか正当な気がする。ただのイケメン好きです、私。絶対！……でも先輩あの時期まるっこかったような……。

だってなんで負けててきゃっきゃ喜んでる男に萌えなきゃいけないわけ！？

ええい！

けれど、超好きです。

手伝いを始めたのは中学生の時。

私はどちらかと言えば要領の良い、嫌な女タイプだったので、そんなに高校の入学が決まり、暇をしていたのだ。そう考えると、当時は精々、先輩の家にお邪魔して、さりげなくパンツを奪ったり、トランクスを嗅いだり、シャツを盗んだり程度しかしていないので、今と比べると大した事がない。まだまだだね。いや、大概だろう。えへ。

自分突っ込み。

私の家の家業は特にない。本当に近所付き合いだ。

私の特技はデイトレ。何も其処まで嫌な女にならなくても、と自分でも思うけれど、向いてるのだから仕方がない。

「おーい、上木ー」

ていうか、先輩、いい加減気付いてくださいよ。

どこのラノベの主人公ですか？あなた。

とかなんとか思いながら今日も私は働く。

しっしと呆けてる女性の視線を追ひ払いながら。

「なあ、上木。こんな事を尋ねるのもなんだけど、……オマエ、下着盗まれた事ある？」

——盗んだことはあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7871z/>

各角恋愛模様（短編寄せ集め）

2012年1月10日09時47分発行